

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 ウィメンズヘルス看護学分野	修了年度	2024 年度
氏名	新田 美里	指導教員 (主査)	小泉 仁子 (藤井 仁)

論文題目	精神疾患合併妊産褥婦の助産ケアにおける困難感やジレンマと職場ストレスとの関連 -周産期医療施設に勤務する助産師に焦点を当てて-
------	--

本 文 概 要
<p>【目的】</p> <p>本研究は、精神疾患合併妊産褥婦を受け入れる周産期母子医療センターに勤務する助産師が抱える困難感やジレンマの実態を明らかにし、それらと職場ストレス尺度の点数との関連を検討することを目的とした。</p> <p>【方法】</p> <p>関東圏の総合・地域周産期母子医療センター98 箇所の、596 名の助産師に精神疾患合併妊産褥婦の助産ケアにおける困難感やジレンマ、個人属性、職場ストレス尺度について調査を行った。本研究の研究デザインは混合研究法とした。調査期間は、2024 年 6 月 21 日から 2024 年 9 月 30 日である。助産師が抱える困難感やジレンマを従属変数、職場ストレスを独立変数とし、スピアマンの順位相関係数等を用いて分析した。</p> <p>【結果】</p> <p>199 名（回収率 33.38%）から回答を得て、有効回答数 197 名（有効回答率 98.9%）を統計解析の対象とした。回答した助産師のうち、89.85%が困難感、76.65%がジレンマを抱えていた。困難感が特に強かった項目は、希死念慮・自殺行為への対応、妊産褥婦が自分に依存的になること、母乳育児支援であった。職場ストレスの下位尺度の平均は、多忙・業務過多が最も高く、患者ケアに関する葛藤、業務遂行に伴う重責の順であった。困難感とジレンマの相関は、母乳育児支援（スピアマンの順位相関係数 $\rho=0.420$）、連携業務の量的負担（$\rho=0.402$）、深夜勤務（$\rho=0.450$）が高かった。困難感が多忙・業務過多、ジレンマは業務遂行に伴う重責、両者とも患者ケアに関する葛藤の職場ストレスが高かった。精神科が外来のみの病院は、精神科病棟がある病院より、仕事に関する知識不足により自信をなくす、業務上のミスにより自信をなくす、の設問の得点が高かった。</p> <p>【考察】</p> <p>困難感やジレンマは職場ストレスとして関連しているという点で、藤村ら（2016）が指摘した助産師のバーンアウト要因と一致した。特に、母乳育児支援や連携業務の量的負担は、ジレンマとの正の相関が高く示された。これらは、久富ら（2022）が指摘した精神科看護に特有の「看護者の理想と現実の乖離」によるジレンマと類似している。この結果から、これらの困難感が助産師の心理的・倫理的負担を強めていることが示唆された。また、精神科病棟のない病院では、知識不足や精神科医師の不在がジレンマを引き起こしている可能性がある。これらを解決するには、助産師の心理的負担を軽減し、精神疾患合併妊産褥婦への支援を向上させる体制の整備が必要とされる。</p> <p>【結論】</p> <p>困難感とジレンマには正の相関があり、特に母乳育児支援、深夜勤務、連携業務の量的負担が高かった。また、「多忙・業務過多」「業務遂行の重責」「患者ケアの葛藤」といった職場ストレスと関連していた。さらに、精神科病棟が外来のみの施設では、助産師の自信喪失などのストレス得点が高かった。精神疾患合併妊産褥婦に質の高い支援を提供するためには、メンタルヘルスケア教育の充実、産科と精神科の連携強化、助産師の心理的サポート体制の構築が必要とされる。</p> <p>【キーワード】</p> <p>精神疾患合併妊産褥婦、助産ケア、困難感、ジレンマ、職場ストレス</p>